

## 西洋古典籍の古代・中世西アジアにおける受容

高橋 英海

(東洋文庫研究員・東京大学大学院准教授)

古代・中世のシリア語およびアラビア語翻訳書の西洋書発展における歴史的役割を考え、その重要性および影響力を分析して、西アジアの言語による翻訳が発展していく過程を歴史的かつ地理的に考察する。

1. はじめに：シリア語について
2. シリア語への翻訳の背景
  - 1) アラム語としてのシリア語
  - 2) 被支配民族の言語としてのシリア語
  - 3) キリスト教言語としてのシリア語
3. 最初期のギリシア語非キリスト教文学のシリア語への翻訳
  - ・学校での教科書として、修道文学として？
  - ・翻訳の際の変更：知名度の低い固有名詞の削除、異教的要素の削除
  - ・格言集、実用書等（文法書、農学書、博物誌）
4. 哲学書・医学書等のシリア語への翻訳と受容
  - 1) 6世紀中の翻訳および註解書
  - 2) ケンネシュレー修道院を中心とする翻訳活動（7～8世紀）
  - 3) アッバース朝初期（8世紀）
  - 4) アッバース朝下の翻訳（9世紀以降）
    - ① 6世紀中の翻訳および註解書：翻訳、哲学関係の作品
    - ② ケンネシュレー修道院を中心とする翻訳活動（7～8世紀）
    - ③ アッバース期のシリア語への翻訳
5. アリストテレスの著作のアラビア語への翻訳
  - 1) 8世紀中の翻訳
  - 2) 「キンディー・サークル」の翻訳
  - 3) フナインらによる翻訳
  - 4) 「バグダードのアリストテレス学派」
6. アラビア語への翻訳
  - 1) 翻訳の種類
    - ・格言集等、医学書、数学諸学（幾何学、天文学）、哲学書
    - ・歴史書、文学作品（ホメロス、悲劇等）の翻訳の欠如
  - 2) 翻訳の背景と動機について
    - ・ササン朝ペルシアの伝統、ウマイヤ朝の官僚機構、シリア語キリスト教徒の役割の見直し
    - ・教会内の伝統主義者と「親ギリシア」主義者との対立